

母語能力なくして何が出来るか (大学生のSPI 指導の現場から)

鷲北貴史 A

1 なぜ学校教育部会が日本語を取り上げるのか

学校教育部会の今回の企画に関して、ある会員の方からご批判をいただいた。

「日本語部会でやるべき内容ではないのか？鷲北さんのところでこのテーマをやる意味が分からない。もっと他に取るべきテーマはあるのではないかと。」

上記のご批判をされた方々に対し、部会長として学校教育部会の姿勢を再度表明させていただく。ユニバーサルアクセス段階を迎え、いまや大学教育は大いなる変容を遂げた。従来の「大学とは～あるべきだ」という一部の上位校の先生方の言説では、大学のリアルは説明不可能なほど、階層差があり学力差もあるのだ。まさにディバーシティの時代である。

大学生の指導をしていると、日本語能力が問題となり、「テキストが読めない」「就職試験の文章題が解けない」という事例が現場で多数見られた。これは階層性によるもので、学習習慣の無いボーダーフリーの大学ゆえに起こる事象だと考えていたのだ。また数学の文章題に関しても、数学リテラシーの方に問題があると考え小学校の計算ドリルをやらせたりしていたのだ。しかし、実は問題は日本語能力にあるというという結論に達したのである。

筆者は高崎経済大で非常勤をしている。学生からの要望で、就職数学の自主ゼミを開講しているのだが、センター数学は8割以上取れていた学生が、数学文章題が全く解けないという事例にぶちあたったのだ。文章題の要求している意味をレクチャーすると、鮮やかにスラスラと問題を解いていく姿を見たとき、選抜が機能している公立大ですら、母語能力でつまづいている学生がいる、就職試験数学が解けないのは数学リテラシーよりも、日本語リテラシーに原因があったのだ

A: 高崎経済大学経済学部/LEC 大学事業部

と思い知らされたのだ。

大学教育におけるリメディアル教育の在り方を問い、そのためには小中高大がどのような連携・接続をしていくことが良いのか？大学入学前に何をやり残して進学してくるのか？この「問い」に対して我々が導いた結論は、「日本語リテラシーが欠如した大学生達のリアル」であった。そしてその問題を考察するために、義務教育段階での国語教育の在り方を知り、それが大学教育にどのような影響を与えているのかを考察する企画が必要不可欠だったのだ。「始めに日本語ありき」では無い。大学教育の問題を探っていく過程の帰結なのである。これが今回この部会がこのテーマを選んだ理由である。

2 日本語リテラシーの欠如が大学教科書を読めなくしているリアル

筆者の前職は廃校となったボーダーフリーの私大である。そこで学習支援センター長をしていた。資格を取得するコンセプトの大学だったので、宅建、行政書士などの学習をしている学生が、学習途中で挫折していく姿が多く見られた。テキストに書かれている日本語が理解できないのである。

具体的事例としては、行政書士の学習者からどうしてもテキストが分からないという質問がきたのだが「公共の福祉」という言葉につまづき、「辞書を引いても何がイイタイのか分からない」という内容。小学生にでも分かる言葉に置き換えて説明する。「みんなで静かに勉強する図書館みたいなところでは、自分が騒ぎたくても、みんなのために我慢しなければいけないってことだよ。」こう説明すると、「やっと分かった」と納得して学習を続けられるという事例である。7年間この大学では、学習支援担当者として勤務していたが、日常的にある風景だった。

筆者は第5回大会のティーチインで、学生が分からない日本語を学生の言葉に置き換えて説明するという提案を、バーンシュテインの言語コード理論の文脈で行ったが、主に日本語部会の方々から多大なるご批判をいただいた。しかし現実には大学テキストの言葉は難解すぎて理解不可能なのである。それを彼らが使っている日本語に置き換えて説明する、日本語トランスレートをすることで、学習が可能となる現場はいくらでもある。

これは、堀先生の今回の原稿で分かったことがある。「登場人物はどんな気持ちでしょう」という発問が、小学校1年生から高校3年生までなんの系統性もなく繰り返されるのが国語の授業だというわけだ。1)

つまり心情を問うことが要求される国語授業において、法律の教科書を理解する力はないという仮説が立てられる。また、高松先生の今回の原稿に「現実の言語生活は今日極端に貧困化している。「本は一切読まない生活」と「手では一切書かない生活」が蔓延してしまっている。」2)とあるように、学生は自分の手の届く言語で、生活をしている。今や小学生からスマホを持つ時代、書く作業は打つ作業へと変わり、自分の手の届く言語でコミュニケーションを取っていることが、テキストが理解できない、それ以前に読めないという現実を生んでいるのかもしれない。

3. 日本語リテラシーの欠如が数学文章題を解けなくしているリアル

冒頭で指摘したように、筆者は数学リテラシーが欠如しているから文章題が解けないという大いなる勘違いをしていた。筆者は理系のS大学、文系のT大学で、就職試験の数的処理を単位付きで担当、また資格試験予備校で公務員試験入門講座を担当している。この現場ではSPIや公務員試験の数学文章題に苦戦してる学生を多く見かける。文章題で要求されている日本語を数式に置き換えられないのである。これはS大学でタイから留学している学生が、数学能力は抜群に高いのだが日本語を読み取りきれずに数式が立てられない事例があった。日本人学生がいっしょになって文章題を考えるのだが、やはり解けないという現実がある。

今、大学入学前に身に付けておくべきは日本語リテラシーなのだ。そのことがなぜ達成できず大学へ進学

してくるのだろうか？小中高大の連携はどのように達成されることが可能なのだろうか？学校教育部会では、この問題を堀先生、高松先生とともに、そして会場の皆様とともに探っていきたい。

【資料】学生が苦戦した就職試験数学の問題

① スーパーで定価880円の刺身が、夕方には二割五分引きで売られ、さらに閉店まぎわにはその売値から四割引きになった。夕方に売ったものは1パックあたり310円の利益だった。この刺身の1パックあたりの原価はいくらか。

② 時速60キロで走っている長さ200メートルの電車を、10秒で追い越していった車がありました。この車の速さは、時速何キロでしょう。

③ 現在母親は35才、3人の子どもの年齢はそれぞれ11才、8才、4才である。3人の年齢の合計が母親の年齢と等しくなるのは何年後でしょう。

④ ある寺院の拝観料は1人360円であるが、20人を超える団体については超えた人数分だけ1人300円になる。あるグループがこの割引制度を使って拝観したところ、1人ずつ拝観料を払うよりも全体で1680円安くなったという。このグループの人数は何人か。

⑤ ある水槽を満水にするのに、A、Bの二つのポンプを使うと10時間かかった。はじめにAだけを4時間使った後、残りをBだけで入れると18時間で満水になった。Aだけで満水にすると何時間かかるか。

引用・参考文献

- 1) 義務教育で培う国語学力 (堀 2015)
- 2) 国語科授業に対する大胆な改善提案 (高松 2015)